浪華十詠とは

「浪華」は「難波」を華やかに言い換えた言葉。つまり、難波（現在の大阪市）から見える十箇所の景色を詠んだ和歌が浪華十詠です。まずは「難波」そして「十詠」というキーワードからみていきましょう。

難波

難波は、現在の大阪市上町台地を中心とする地域を指します。

古代より、淀川河口に位置する港・難波津があり、交通の要衝だった場所として知られ、古墳・飛鳥時代には「難波宮」が置かれ、歴代の天皇が政治の拠点とした場所でもありました。のちに都が奈良の平城京に移った後は衰退しますが、天王寺や住吉、熊野へ赴く際の通路として、人の往来が絶えることはありませんでした。

近世には、豊臣秀吉が大坂城を築城して発展を遂げます。町を流れ大阪湾に注ぐ川・水路によって、難波は大阪の海の玄関口として、江戸時代も流通・経済の中心地として栄えます。

和歌の世界では、「海浜の風景」としてイメージされる土地。湿地帯の水辺に群生する「葦」、浅瀬を舟が航行するための水路の境界を示す杭「澪標（みをつくし）」が景物として詠み込まれた歌がつくられてきました。

難波と言えば、海辺の風景。まずはここからスタートしましょう。

十詠

シンプルに言うと「ベスト・テン」。難波とそこから見える名所のなかから、十箇所選定し、それについて歌を詠んだものです。似たようなものとして、歌川広重の「東海道五十三次」、葛飾北斎の「富嶽三十六景」を思い出すかたもいらっしゃるかもしれません。あるテーマに沿って「ベスト〇〇」を考えること。これは中国の「瀟湘八景（しょうしょうはっけい）」の伝統からきています。

瀟湘八景

「瀟湘」は中国の湖南（こなん）省、長江中域の洞庭（どうてい）湖に注ぎ込む二つの川（「瀟水（しょうすい）」と「湘水（しょうすい）」）に基づく地名です。中国有数の景勝地として名高く、多くの詩人や画家が訪れた場所です。険しい山々、大きい湖、季節や時間によってさまざまに変化する気候を八通りの景観として切り取って表したのが「瀟湘八景」。宋時代（十一世紀）の画家・宋迪（そうてき）が絵画化したのが始まりです。

山市晴嵐…市のにぎわい
遠浦帰帆…遠方の港に帰っていく船の景色
漁村夕照…のどかな漁村の夕方の光景
遠寺晩鐘…ひっそりとした山あいの寺の鐘が鳴るところ
瀟湘夜雨…しとしとと降る夜の雨
洞庭秋月…湖上に浮かぶ月
平沙落雁…砂浜に雁が舞い降りるところ
江天暮雪…山に雪が降り積もるさま

「瀟湘八景」は、日本においては鎌倉時代後期、禅をはじめとした中国文化の流入とともに受容されました。中国への憧れとともに、水墨画の画題とされたほか、「瀟湘八景詩／和歌」として詩歌の世界で詩歌題として詠まれ、景勝地を捉える一つの型・フレームのお手本となっていきます。次第に、日本の風景にあてはめた「博多八景」「近江八景」とご当地版も考え出されるように。こうした展開を背景として、「浪華十詠」が詠まれたのです。